

2017年7月18日

報道関係各位

公益財団法人 笹川スポーツ財団

子どものスポーツ参加、母親は「負担」よりも「やりがい」

「小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究(速報値)」

笹川スポーツ財団 2016年度 研究調査事業

「スポーツ・フォー・エブリワン」を推進する公益財団法人笹川スポーツ財団(所在地:東京都港区 理事長:渡邊一利 以下:SSF)は、小学生のスポーツ活動をささえる立場にある保護者の意識調査を実施しました。小学1~6年生の第1子を持つ母親を対象にインターネットで調査し、保護者が子どものスポーツ環境をささえる行動の実態、子どものスポーツ環境やそれをささえる保護者の意識を明らかにしました。以下に主な調査結果について報告いたします。

※なお、本レポートの全文は、SSF ウェブサイトでご覧いただけます。

【主な調査結果】

1. 母親の方が熱心に関わっている

子どものスポーツ活動に対し「母親の方が熱心」と回答した割合は73.7%、「父親の方が熱心」と回答した割合は26.4%だった。

→詳細:次ページ「図1」(報告書 p.7 「図2-1」)

2. 多くの母親が、スポーツ活動への関与に「やりがい」を感じている

子どものスポーツ活動に関わっている母親に対し、「やりがい」と「負担感」の程度を尋ねたところ、ほとんどの項目で、「負担」より「やりがい」を感じているという回答が上回った。

→詳細:次ページ「図2」(報告書 p.10 「図2-5」)

3. 子どもがスポーツ活動をしらない理由の上位は「保護者の負担」

子どもがスポーツ活動をしていない家庭の母親に対し、その理由を尋ねたところ、「送迎や付き添い」「費用の負担」「係や当番の負担」など保護者の負担が上位に見られた。

→詳細:3ページ「図3」(報告書 p.12 「図3-1」)

■研究担当者コメント

保護者は、子どものスポーツ環境を「ささえる」重要なアクターである。調査結果からは、スポーツ活動をしている子の母親は「ささえる」行動にやりがいを感じている一方で、スポーツ活動をしていない子の母親にとっては、そうした行動に対する負担感が参加をためらう理由となっている状況が浮かび上がった。

多様な家庭の子どもを参加可能にするためには、地域スポーツの施策やクラブの運営において、保護者の役割を見直すこと、あるいはOG・OBや保護者以外の地域住民も協力しやすい仕組みを構築することが必要であろう。また、スポーツ活動をしらない子の母親においては、「保護者の役割は負担」というイメージが膨らみ過ぎている感も否めない。「スポーツ・フォー・エブリワン」の観点からは、スポーツ活動そのものの魅力はもちろん、家族にとってのメリットや支え手のやりがいについても、今以上に積極的な情報発信がなされてもよいのではないだろうか。

【笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所 研究員 宮本幸子】

この件に関するお問合せ先: 笹川スポーツ財団 スポーツ政策研究所: 宮本・澁谷
TEL: 03-5545-3303 info@ssf.or.jp

【調査概要】
【調査名】 小学生のスポーツ活動における保護者の関与・負担感に関する調査研究

【調査対象】 小学1～6年生の第1子をもつ母親。第1子の属性が各学年男女400名ずつになるように回収した。有効回答数は2,368名

※小学生の子どもが複数いる場合は、第1子について回答してもらった。

【調査項目】 ①全体への質問

現在行っているスポーツの種目／子どもの運動能力への期待／満足度／スポーツ環境に対する意見／家庭環境、保護者の属性など

②現在行っている種目がある場合（子どもがスポーツ活動をしている）

所属する団体の種類／実施頻度／保護者の関与：母親の関与・父親の関与、保護者組織の有無、母親のやりがい・負担感、母親自身の変化

③現在行っている種目がない場合（子どもがスポーツ活動をしていない）

スポーツ活動をしていない理由／子どもがスポーツ活動する場合の母親の負担感

【調査期間】 2017年2月

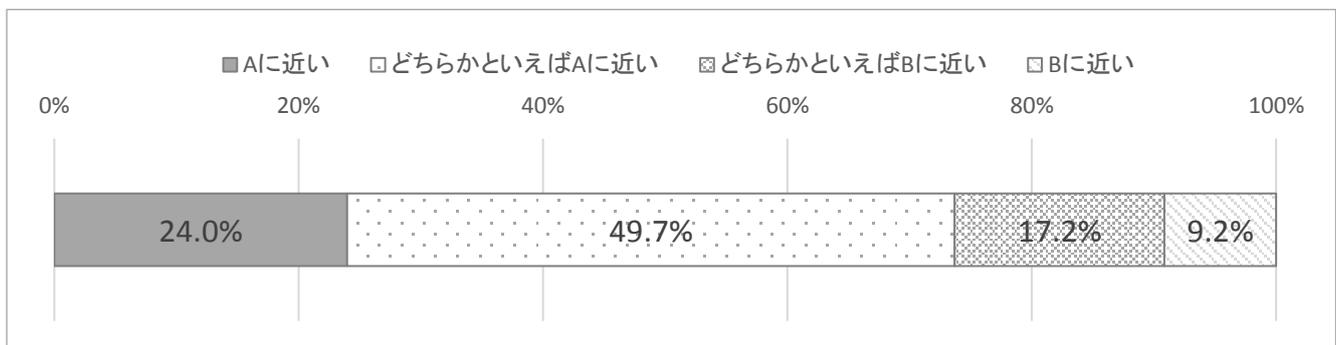
【研究主体】 公益財団法人 笹川スポーツ財団

【調査のポイント】
1. 母親の方が熱心に関わっている

団体（クラブ・教室等）に所属して、定期的にスポーツ活動を行っている子ども（＝以下、「スポーツ活動をしている子」とする）の母親に対して、母親と父親のどちらが熱心に関わっているかを尋ねた。その結果、「母親の方が熱心に関わっている」が73.7%、「父親の方が熱心に関わっている」が26.4%で、「母親の方が熱心」とする回答が多かった。

図1 家庭内の様子（スポーツ活動をしている子） [N=1,201]

A:あなた（母親）の方が熱心に関わっている / B:配偶者（父親）の方が熱心に関わっている



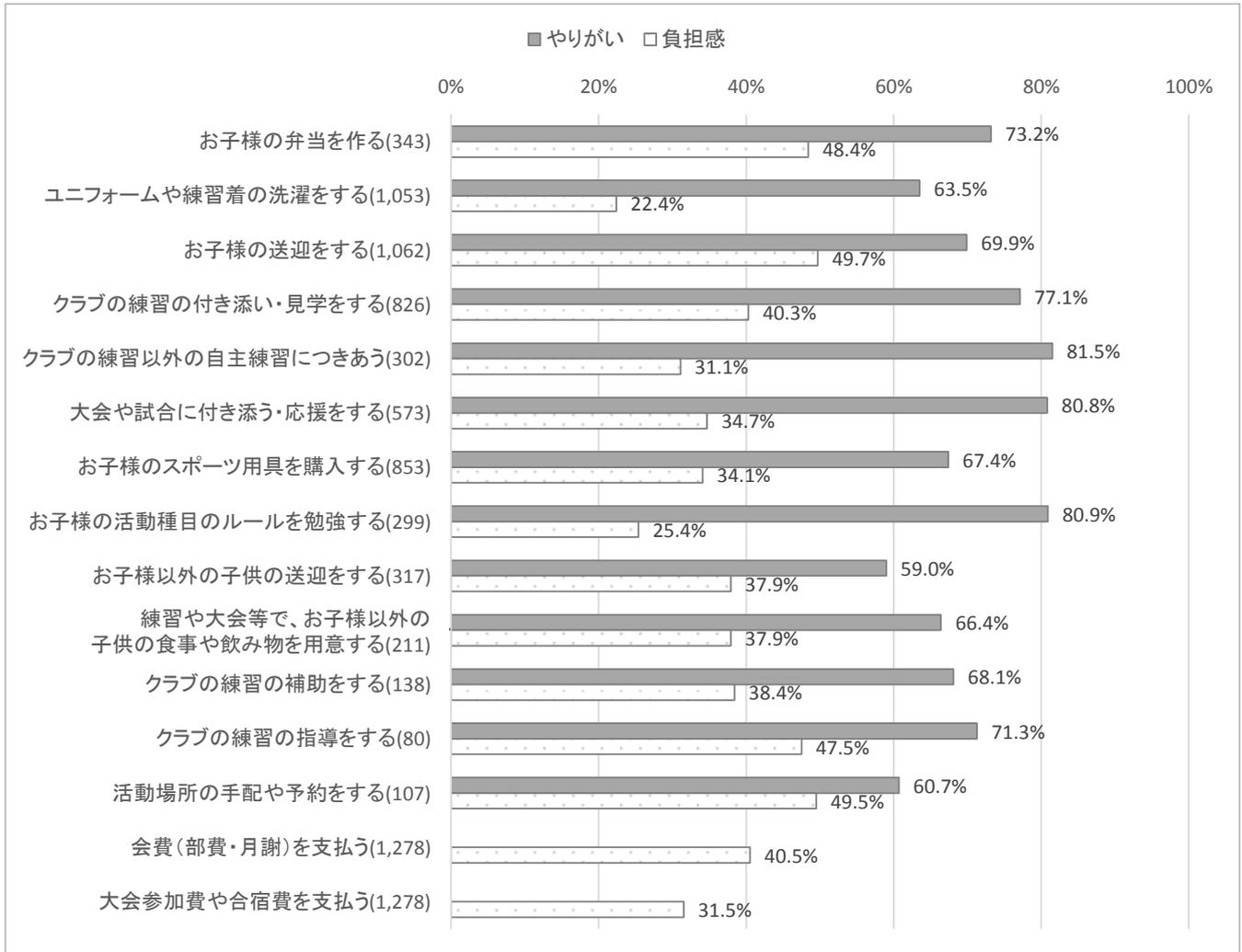
注1) 配偶者がいる人のみ回答。

注2) 実際の設定問では行っている種目ごとに尋ねている。複数の種目を行っている場合は、1つめに選んだ種目について集計をしている（2種目目以降で集計しても傾向が変わらないことを確認している）。

2. 多くの母親が、スポーツ活動への関与に「やりがい」を感じている

スポーツ活動をしている子の母親に、実際に母親自身が行っている支援について、どの程度「やりがい」や「負担感」があるのかを尋ねた。「自主練習につきあう」「大会や試合に付き添う」「ルールを勉強する」は約8割が「やりがい」があるとしたのに対して、「負担感」があるのは約3割にとどまった。「負担感」が高いのは「送迎」「活動場所の手配や予約」などであった。

図2 母親のやりがい・負担感（スポーツ活動をしている子）



注1) 「やりがい」は「とてもやりがいを感じている」+「まあやりがいを感じている」の%。

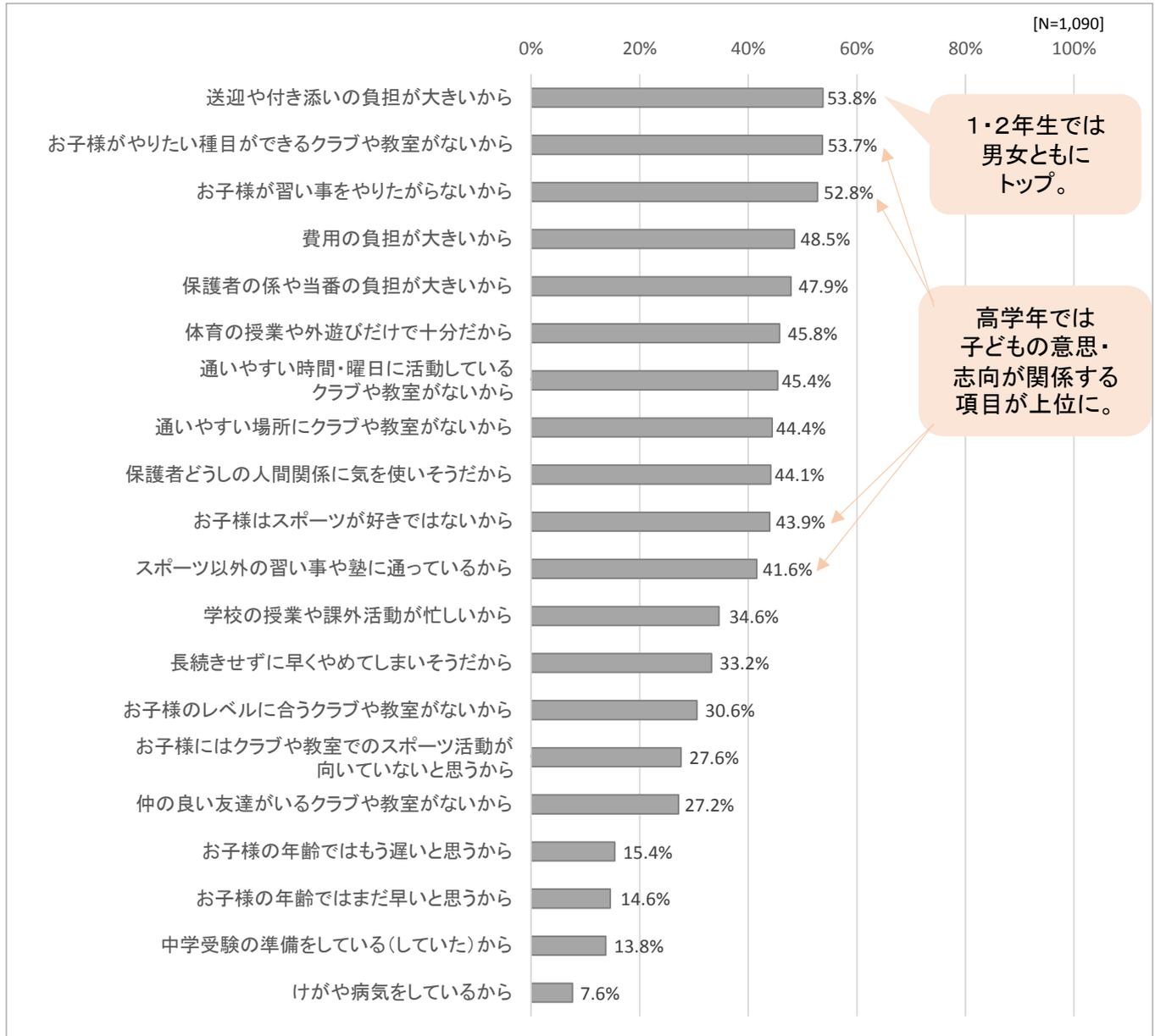
「負担感」は「とても負担に感じている」+「やや負担に感じている」の%。

注2) 上から13項目に関しては、別の質問でそれぞれの支援を「よくする」「時々する」と回答した人を母数にしている。()内がそれぞれの母数となる。

3. 子どもがスポーツ活動をしていない理由の上位は保護者の負担

スポーツ活動をしていない子の母親に、その理由を尋ねた。「送迎や付き添いの負担」「費用の負担」「保護者の係や当番の負担」といった保護者の負担に関する項目が、いずれも上位にあがっている。また、それらの項目は低学年でより高い数値となっていた。高学年では、「お子様が習い事をやりたがらない」「スポーツ以外の習い事や塾に通っている」などの、子ども本人の意思に関わる項目が上位にあがっていた。

図3 スポーツをしていない理由（スポーツ活動をしていない子）



注1) 「とてもあてはまる」 + 「まああてはまる」の%。